

イスファハーンのマドラサ調査から

——建築形態と分布状況について——

深 見 奈緒子

序

イスラーム社会にみられる伝統的建造物のなかでマドラサ建築という種別は特筆にあたいしよう。モスク建築や廟建築とならぶ宗教建築のひとつであり、権力者の寄進の対象となり、歴史的な遺構もかずおおく存在する。しかもある時代のある都市に集中して遺存する傾向が指摘でき、それぞれのグループが特有な建築形態をとることも興味ぶかい⁽¹⁾。

本稿では、サファヴィー朝期のマドラサの遺構が多数現存するイスファハーンに着目し、現存マドラサの網羅的な建築的調査をとおしてその形態と分布をのべる。あわせて、今はうしなわれてしまったものの文献に登場するいくつかのマドラサの都市内の位置を比定し、イスファハーンにおける 11 世紀以来 20 世紀初頭までのマドラサの建立活動の地理的推移について考察し、イスファハーンの都市の発展をかんがえる際の一助としたい。

はじめに、イラン、中央アジアを中心にひろくイスラーム世界をみわたして、サファヴィー朝期までのマドラサ建築の系譜をたどり、イスファハーンのマドラサの建築的位置づけをおこなう。どのような過程をへて、いつごろからマーダレ・シャーに代表されるような建築が形成されたのかという点からはじめたい。なお、文中に記載したイスファハーンのマドラサのナンバーは表 2 の番号をあらわす。

I イラン、中央アジアのマドラサの建築形態

イランおよび中央アジアにおいてなんらかの遺構が存在するとの報告がある1650年⁽²⁾までに建立されたマドラサを可能なかぎり収集し、年代順にならべたのが表1である。歴史的にその建築形態の変化をたどってみよう。

① 初期の状況

ウラマーを育成するための高等教育施設であるマドラサは11世紀にはイスラーム世界の普遍的制度として誕生したといわれる。それ以前にもいくつかのマドラサの記述はあるものの、いまのところその建築的実態は不明である。11世紀にさかのぼるマドラサの建築遺構は、イランおよび中央アジアだけから報告され、それらの実情は廃虚あるいは考古学的な発掘遺構が存在するのみで、上部架構まで完全な現存建築はない。

このような状況のイランや中央アジアでは、12世紀を含めてもマドラサの遺構は少ない。イスファハーンにも創建をセルジューク朝期にさかのぼるというハジ・ハサン (No. 1) が現存するが、その建築形態は明らかにサファヴィー朝期に改修されている。表1にあらわしたモンゴル侵入以前のいくつかのマドラサの断片的な遺構からいえる建築的特色をまとめれば、以下の5点に集約できよう。1. 中軸線に関して線対称な平面をもつ4イーワーン式あるいは2イーワーン式の中庭建築である。2. 中庭規模は一辺20から30メートル程度である。3. イーワーンであったことをものがたるコの字型平面の奥にドーム室を連結した例はない。4. 中軸線の一方の端部を入口とし、入口の上に二基一對のミナレットをたちあげる例や両脇に対のドーム室を配する例がある。5. 居住の用に供したと思われるいくつかの小室を確認できる例もある。

これらの形態について、バルトルドはイーワーンがアフガニスタンや中央ア

ジアにある仏教のヴィハーラ建築に起源するといひ、ゴダールはホラサーン地方の住宅建築に起源するととく。ヒレンブランドは二説を紹介した上で、近年発掘されたアフガニスタンや中央アジアの仏教遺跡の重要性をといている⁽³⁾。

② 13 世紀中葉から 14 世紀末まで

その後、13 世紀前葉にモンゴルが侵入してから 13 世紀末までイランおよび中央アジアにはイスラーム建築の遺構は非常に少なく、14 世紀初頭になると遺構数がふえる。マドラサについていえば、イル・ハーン朝期のイスファハーンに建立されたイマーミエ(No. 2, 1324 年)まで遺構はみあたらない⁽⁴⁾。イマーミエはサファヴィー朝期に改修をうけ、スッフア・ウマル(No. 5)は礼拝室とその前のイーワーンを除くと大部分が崩壊し、のこる 3 例は廟まわりが現存するのみであるとはいへ、イスファハーンにのこる 14 世紀の諸例はマドラサ建築の新傾向を物語る。新たな点を列挙すれば、1. 中庭のまわりに整然とした 2 層の小室群を配した例がある。2. 主軸イーワーンの奥に礼拝室をもつものがある。3. 入口は主軸をずれることもある。4. 墓を併設した例がある。

このような点がどのような過程をへて出現したかをさぐるには、イランおよび中央アジアにおける 13 世紀前葉から 14 世紀初頭までの実例の少なさを補完するために 12 世紀以後の他地域の実例、特にシリア⁽⁵⁾、アナトリア⁽⁶⁾、イラク⁽⁷⁾、カイロ⁽⁸⁾のマドラサと比較することが有効である。

第 1 の点はマドラサが寄宿制の施設であり、同じ規模の中庭の場合に定員を倍増できるという点から重要である。2 層の居室群のもっとも早い例を辿れば、アナトリアのディヤルバクルにあるマスーディエ(1198-1223 年)へと到達し、その後アナトリアの中庭式のマドラサ⁽⁹⁾では居室を 2 層に配置することが通例となる。13 世紀のバグダードの 4 法学派が教授されたという⁽¹⁰⁾ムスタンシリアも 2 層の居室群を有する⁽¹¹⁾。セルジューク朝期のマドラサはもちろんモスクや隊商宿をみわたしても中庭周囲を 2 層に構成する例はのこっていない⁽¹²⁾。

したがってイランにおいては14世紀になってマドラサで2層に居室を配する必要性が生じ、他地域の実例を模倣してイスファハーンに2層構成のマドラサが出現したと推察される。2層に居室を配する必要性を考えれば、限られた敷地の中で学生数を増やす、外界から中庭空間を隔離するために中庭まわりを高く構築する、中庭を垂直性の強い場に構築する⁽¹³⁾などが考えられる。

第2の点はそれ以前のマドラサでも礼拝は行われていたかもしれないが、主軸の終点という建築上重要な場にミヒラブをしつらえ、他の部分と区画した礼拝室としての占有空間を構築したという点に意味がある。キブラ方向に独立した礼拝室を有する例はすでに12世紀からシリアのマドラサにある⁽¹⁴⁾。一方、セルジューク朝期のイランのモスク建築はキブラ・イーワーンの奥に単一のドームをいただく礼拝室を有する⁽¹⁵⁾。これらの点から、マドラセ・イマーミエやスッフア・ウマルの主軸イーワーンの奥に配された礼拝室は、建築的にはセルジューク朝のモスク建築を踏襲し、すでに12世紀から13世紀にかけてシリアでマドラサの必須要素となっていた礼拝室が14世紀にはイランや中央アジアのマドラサでもかなり重要となり、主軸イーワーンの奥という大事な場が与えられるようになったといえよう。

第3の入口が主軸からずれる点については、12から13世紀のシリアやエジプトのマドラサにもこの傾向がみられ、稠密な市街地の不整形な敷地内にマドラサ機能を配した結果ととかれる⁽¹⁶⁾。14世紀のイマーミエやスッフア・ウマルにもこの説を適応することができよう。この一方でスルタン・バフト・アガー(No.6)にみられるように主軸上の入口を強調してその上に二基一対の塔を建てるマドラサもあり、セルジューク朝以来のマドラサの正面性を保持する伝統も消えることはなかった。

第4のマドラサに廟を併設する件は、前世紀のシリア、アナトリア、エジプトではこの傾向がかなり強く、寄進者の廟を併設する場合が多い。三浦氏のダマスクスに建立されたマドラサの研究によれば、寄進者がマムルーク軍人の場

合に特に墓が併設されることがおおく、『子孫に財をのこし自身の行為を後世にまで記念するという意味』をもっていたという⁽¹⁷⁾。イスファハーンの14世紀の5例中4例(No. 2, 3, 4, 6)が廟建築を併設している⁽¹⁸⁾。

③ ティムール朝期のマドラサ

14世期末までのマドラサ建築において共通点はあるとは言え、それぞれが固有の平面をとっていたのに比して、ティムール朝下では似通った平面を有するマドラサがおおい。それらの地理的分布はホラサーン地方と中央アジアに集中し、首都であったサマルカンドとヘラートに大規模な例が遺存する。イスファハーンの15世紀の実例をみれば、入口のみが存在する例(No. 8)、サファヴィー朝期以後の改修を受けた例(No. 7)、サファヴィー朝末に建替えられた例(No. 9)が現存するのみで、当時の中庭まわりの建築形状は不明である。しかしながら、後2者では立派な廟建築が現存する点は当時の様相を物語る。

ここでは中央アジア及びホラサーン地方にのこるいくつかのマドラサから新たな建築特色をまとめてみよう。1. 全体が整形な矩形敷地におさまり隅に塔を建てて外観を強調する。2. 入口は主軸線上にありモニュメンタルなイーワーンとなる。3. 平面は主軸線に関して線対称で中庭の4隅に特別な角部屋を配する。4. 居室配置は2層が通例となりアルコーブ状の前室をもつ奥行の深い居室が普及する。5. マドラサに建立者の墓廟が併設されるものが半数以上にたっし、墓は主軸奥や隅部の角部屋など重要な位置をしめる。

第1の全体の計画性に関しては、中央アジアやホラサーン地方のマドラサはティムール朝の君主や直系の係累によって都市計画の一要素として建立されたものが多い点へと帰着しよう。大マドラサは大モスクと対峙されたり、寄進者の廟を内包したり併設することもある。寄進者の身分の特殊性に加えて、これらのマドラサが建立された中央アジア建築の特徴も考慮せねばならない。一般に、中央アジアのイスラーム建築はイランのイスラーム建築に比して外観を強

調し整形な敷地に立地する傾向がつよい。

第2の入口の強調については、セルジューク朝以来の伝統に加え、大規模でしかも都市計画の核となるような存在を外に向って際立たせるために、単に入口だけでなく入口を中心とする正面ファサード全体がマドラサの表象として必要とされたのであろう。

第3の整った平面と角部屋の実在については、上記のような整然とした敷地計画のもとで、ある程度マドラサ建築の設計に対するマニュアル化が進んだことがよみとれる。その中で居住用の小室、2ヶ所あるいは4ヶ所のイーワーンの他に、より広く手のこんだ曲面天井をいただく部屋が平面の4隅あるいは主軸のつきあたりに設けられ、礼拝室、墓室、教室、図書室などの特別室として機能をあたえられたのである。第4の居室の定型化もマニュアル化の一端としてとらえられる。

第5の建立者の墓廟に関しては、自廟の永遠性がマドラサを建設する目的のひとつとなったことが考えられる。それは、ザンギー朝やアイユーブ朝のシリア、マムルーク朝のエジプトのマドラサと似た状況であるが、先に指摘したように建立者はティムール王族や彼らの妻達におおい。このように、マドラサ建築は限られた人々の寄進の目的となっていたので、それらが似通った平面をもつということは王家に関連する建築家の手によって定型化が進んだことが推察される。

以上から、ティムール朝期には君主達の設立したマドラサにおいて基準設計とでもいえるような定型が中央アジア、ホラサーン地方を中心に確立したといえる。

④ 16世紀以後の傾向

以上のような過程を経て、16世紀以後のもっとも注目すべき事象は、マドラサに建立者の廟を併設する傾向が薄くなる点である。この時代にはイランと中

中央アジアでマドラサ建築に多少の差異があらわれる。16世紀の例を見れば、ブハラでは先のティムール朝の伝統を強く継承し、一方イスファハーンでは16世紀前半の2例(No. 10, 11)は後世の改修のため不明な点が多いが、16世紀末のモッラー・アブダッラー(No. 12)には明らかにイル・ハーン朝の実例とは違う点、15世紀の中央アジアの定型を継承しながらいくつかの改良点をみいだす点が指摘でき⁽¹⁹⁾、その改良は17世紀末までイスファハーンのマドラサにおいて継続的な進化を遂げる。

サファヴィー朝期のイスファハーンのマドラサとの比較のために16世紀以後の中央アジアのマドラサの特徴を列挙しよう。1. 平面の外形が整形で隅に塔を建てる。2. 外に向う正面ファサードを強調し中軸線上に大きな入口イーワーンを配しその両脇にドームの架かった対をなす角部屋を配する。3. 街の中心に立地し、広場とむすびつくことが多く、比較的規模がおおきく、大半が2層に居室を配する⁽²⁰⁾。

これに対して、サファヴィー朝期のイスファハーンの実例は、1. 平面の外形が不整形でミナレットや隅の塔をもつ例はない⁽²¹⁾。2. 外にむかうファサードとしては入口イーワーンのみを強調し、中庭の隅は特殊な角部屋とせず隅切り⁽²²⁾して居室を効率よく配置する。3. 大バーザール沿いと住宅地に立地することがあり規模も大規模から小規模まで5つのランク分けができ、それに応じて居室配置も2層と1層の場合がある。4. 2層の場合には階段室が中軸線の両脇につくられ外廊下式となり2階居室が各室占有の中庭に面するアルコーブをもつことが次第に定型化する。

サファヴィー朝期のイスファハーン以外の遺構としてはシーラーズのハーン、ギルマンのガンジャリ・ハーンに注目できる。両者ともイスファハーンのいくつかの実例と共通点は多いものの、ハーンでは、ファサードの両端に円形の櫓を設ける点、隅に八角形の特別室を設ける点は中央アジアの実例にちかくサファヴィー朝期のイスファハーンのマドラサには類例を見ない。ガンジャリ・

ハーンでは同時に計画された広場(メイダグ)の短辺をしめる重要な建築となった。イスファハーンではマスジディ・シャーが占めていた位置にマドラサが建築されたことになる。

以上のようにイランおよび中央アジアにおけるマドラサ建築は、大勢の学生が居住する場であり、かつ学問を教授される場であるという機能を果たしながら建築的な発展を遂げた。ティムール朝期に中央アジアでマドラサ建築としての定型化が明らかで、それをより実用的に改良し汎用したものとしてイスファハーンの諸実例が位置づけられる。次章においては、マドラサの調査実例を提示し、さらに上記のような特色をあげるにいたったイスファハーンのマドラサの建築形態について詳述する。

II イスファハーンのマドラサ

1994年および1995年に表2に示したイスファハーンのマドラサの悉皆調査を行った。その際に、依拠した出版物は以下の5種で、表2-1に物件と資料の照合を記載した。

まず第1に地図1に示した1924年の地図⁽²³⁾があげられる。1920年代のザヤンデ・ルードの北岸の市街地を描いたもので、公共建築の種別の表示がありそのいくつかには名称が記されている。多少の歪みはあるものの、細街路網は1956年の航空写真とほぼ一致し、現存宗教建築も多く含まれている点から、かなり正確な地図である。それゆえ、本稿においてはマドラサの位置を検討する際に、都市計画街路が走る前の1924年の地図の街路を航空写真及び現在の地図に重ね、歪みを修正し、かきなおした地図を用いることにした(地図2)。1924年の地図にマドラサとして記載されたものは32棟を数えた。うち、調査によって現存を確認したものが16棟、非現存を確認したものが16棟である。なお、現地調査によってマドラサが存在していたことを確認できるにもかかわらずマ

ドラサとして記載されていないものが17棟を数えた。それらには、モスク10棟、イマームザーデ2棟、タキエ1棟、ハンマーム1棟、住宅地3陳（無印）の建築種別の表示があった。

第2に、ガウベの「サファヴィー朝期のイスファハーン」地図⁽²⁴⁾があげられる。1924年の地図より範囲が広く、ザヤンデ・ルードの南岸も含んでいる。地図には、サファヴィー朝期末までに建立された様々な公共建築と庭園、広場、街路が年代別の色分けをし、現存・非現存の別が表記されている。ただし、非現存のものの位置に関してはかなりの推定が含まれている。この地図上には23棟のマドラサの印が記入されている。本来マドラサでありながらモスクの表示となっているもの3棟（No. 15, 16, 22）、位置が過ちだともわれるもの4棟（No. 2, 4, 49⁽²⁵⁾, 55⁽²⁶⁾）、年代表示が間違っているもの2棟（No. 19, 21）、2つの名をもつマドラサを2件に表示する（No. 44）などが指摘できる。

第3に羽田氏のシャルダンの研究⁽²⁷⁾をあげることができる。翻訳に加えて詳細な注と索引によって、難解ながら克明なシャルダンの記述を地図上におとすことができる程度可能となる。シャルダンは記述の最後の部分にはイスファハーンの市壁内には48の学院があるとするが、うち彼が文中で名称をあげなんらかの言及しているマドラサは26棟⁽²⁸⁾である。26棟のうち現存が確認できたのは6棟（No. 1, 3, 6, 12, 16, 17）で、残りの20棟に関しては、現存建築あるいは先のガウベの地図から位置が比定できるものは5棟（No. 36, 44, 46, 59, 60）で、のこる15棟（No. 43, 49, 53, 55, 61～71）に関しては大凡の位置がわかるのみであった。

第4に、羽田氏のサファヴィー朝期のイスファハーンの研究⁽²⁹⁾から街区順にならべたサファヴィー朝期に存在した主要宗教建造物の表を利用した。そこには70棟の建築が示され、うちマドラサ32棟をとりだした。

第5に、ホナルファーとメフラバーディーの記述⁽³⁰⁾を整理し、一つのマドラサが何通りかの名を有する場合には同一のものとして、現存マドラサ35棟と

非現存マドラサ 36 棟にわけ、建立年代順に整理し、可能な限り地図の位置を推定した。現存マドラサについては地図上におとす際に問題はない。非現存マドラサについてはその記述や他の資料から、位置比定可能なもの 26 棟、大凡の位置のわかるもの 25 棟、不明なもの 11 棟となった。

なお、1994、5 年の調査の際に、現存 35 棟のうち、33 棟についてはその実態を調査することができた。ガスル・ムンシーのイスマイリーエとビード・アーバードのミルザ・マフディーについては 1998 年夏の補充調査によって、前者は現存し、後者は数年前に破却されたことを確認した。非現存 62 棟のうち 1924 年の地図に記載された 22 棟については地図上の位置にマドラサが存在しないことを確認した。のこる 40 棟は文献により非現存が伝えられるもので、地図上の位置も大凡あるいは不明確なので今後の課題である。

まず現存建築からいえる建築形態について整理を行い、次に非現存のものも含めて歴史的地理的分布状況を検討する。

III 現存マドラサについての建築的整理

表 2-1 の No. 1 から No. 35 までが 20 世期末にイスファハーンに現存したマドラサである。この中からマドラサ建築の考察に値する 29 棟をとりだし、現存建築の年代順にならべたもの⁽³¹⁾が表 2-2 である。以下表 2-2 の横軸に沿いながらマドラサ建築の特色を述べる。なお、文末にはこれらのマドラサの特徴的な写真あるいは図面を表 2-2 の順に従ってならべた。

① 規模

仔細にマドラサ建築を検討する上で寮制の施設であるという点から、何人ぐらの学生が居住できるように計画されたのかという点は重要である。居室数は層数の違いを反映するので、敷地面積や中庭面積よりもマドラサ規模をあら

わす指標として有効であると判断した。居室の広さは多少の違いはあれ、学生二人が寝起きできる程度の広さである⁽³²⁾ (図 No. 17, 19)。

29 棟の室数⁽³³⁾を数直線上にプロットすると、120 室以上に 2 棟、55 から 68 室に 4 棟、37 室に 2 棟、18 から 26 室に 12 棟、13 室以下に 9 棟と 5 つの集中区域が設定できた。規模のランクとしてそれぞれに A から E の名をつけ、表 2-2 にあらわした。すなわち、A ランクは 120 室以上、B ランクは 55~68 室、C ランクは 37 室、D ランクは 18~26 室、E ランクは 13 室以下である。ランク別の層数を検討すれば、A ランクから C ランクまでは 2 層、D ランクは 1 層と 2 層の混在、E ランクは 1 層であった。歴史的な傾向として D、E ランクの小規模マドラサが時代を超えて存在するのに対し、A ランクから C ランクは唯一の例外 (No. 34) をのぞいてサファヴィー朝期の創建である。

1 室 2 人から 3 人使用と想定すると、それぞれのランクの定員は A ランクは 250 人程度、B ランクは 150 人程度、C ランクは 100 人程度、D ランクは 50 人程度で、E ランクは 20 人程度となり、それぞれのランクに属するマドラサの個数とかけあわせた和をとれば、現存マドラサだけでも 2000 人を超える学生が居住可能な施設を有しているといえる。

1670 年代にシャルダンが記述した市壁内のマドラサ数 48 について考えてみよう。A および B ランクに属する大規模マドラサのほとんどは 1690 年以後に建設されたことを加味し当時のマドラサ学生数の平均を 50 人としても、2400 人の学生収容が可能であったことを意味している。また 1924 年の地図記載の 32 棟では、現存 16 棟の収容数を算定すればほぼ 1500 人でそこに非現存の 16 棟の学生数を加味すると 2000 人から 3000 人の学生を収容することができたことが推測される。したがって、時代によって多少の学生数の変化はあることが考えられるが、1670 年代と 1920 年代のイスファハーンにおいてマドラサが順調に機能していた状態を仮定すれば、2000 人から 3000 人以上の学生がマドラサに居を求めることができたといえよう。

② マドラサ建築の立派さをはかる尺度

マドラサを計画するには規模が必要でそのための敷地が選定される、あるいは敷地が選定されそれに応じた規模が決定される。その次に必要となるのはどのくらいモニュメンタルにマドラサを構築するかという点であろう。ここではマドラサのモニュメンタリティーを考える上に重要な要素でしかも時代性が明確にあらわれる4つの尺度を選んで検討したい。1. 層数, 2. イーワーンの配置と形, 3. 入口の位置と形, 4. 中庭隅の処理。

まず層数は先に述べた規模と大きく関連するが、2層のマドラサは1層のものにとくらべると、規模がおおきくなると同時に立派さもます。層数については時代の偏りはみられず後にのべる立地との関連が強い。大バーザール周辺には2層のマドラサがおおく(図 No. 16, 1), 郊外に位置するマドラサは1層の場合がおおい(図 No. 21, 22)。

2層のマドラサ11棟についての階段位置および2階の廊下の歴史的推移をしらべると、ジャッデ・クーチェック(No. 15)まで階段室は中庭の隅部にあり中庭側の2階居室前のアルコーブが通廊となっていたが(図 No. 15), ジャッデ・ボゾルグ(No. 16)以後⁽³⁴⁾のB, Cランクでは階段室の位置は中庭の中軸線の両脇が定型化し(図 No. 24), 2階では建物の周囲に外廊下をとり2階居室前のアルコーブは各室専用の前室となる傾向(図 No. 25)がみられる。また18世紀と19世紀のAランクの2棟では、中庭の隅に八角形の光庭をもちそこに階段室を配し(図 No. 34), 2階居室は中央通廊の両脇に配される中廊下式をとる。

第2にイーワーンの配置には、中庭直交軸線上の4イーワーン(10例, 図 No. 2), 中庭主軸線上の2イーワーン(15例, 図 No. 13), イーワーンなし(3例, 図 No. 33)の3つの場合があった。4イーワーンと2イーワーンが14世紀以来19世紀までのマドラサ建築の定型であった。ただし、2イーワーンでもイーワーンのない副軸方向の中央部は幅広スパンにすることが多く(図 No. 1,

24), 両者の間に明確な区別があったとはかんがえられない。なお、イーワーンのない実例にはカージャール朝期の住宅の主室⁽³⁵⁾によく似た部屋を教室として採用する例(図 No. 33)がある。

イーワーンの形は、中庭軒線からの立ち上げ、平面の奥行、曲面天井の架構法をしらべることによって明らかとなる。中庭軒線からの立ち上げについて検討すれば(表 2-2 に「高, 中, 低」で表記), 1500 年以前には比較的立ち上げが高く(図 No. 2, 5), サファヴィー朝期になると居室が2層構成の場合にはイーワーンを立ち上げない(図 No. 16, 1)あるいは立ち上げるとしてもかなりわずかとなる(図 No. 26)。時代を問わずイーワーンの奥行が深い場合があり, そこにミヒラブが設置され(図 No. 12) 礼拝室として利用されたり, 現状においては黒板がおかれて教室になる場合や, 中庭側にサッシが入り図書室に改造されている例もある(図 No. 32)⁽³⁶⁾。奥行の深いイーワーンにはトンネル・ヴォールトなどがかり(図 No. 2) 念入りに構築される傾向がある。イーワーンの背後に部屋が接続する場合には一般にイーワーンの奥行は浅くなり, イーワーンは前室空間となる。イーワーンと接続する部屋には歴史の変遷がみられた。古くはドーム室(No. 2, 7)や5部構成の部屋(No. 5)があり, サファヴィー朝期になると三部構成の礼拝室(図 No. 20)やザヴィエとよばれる広く天井の高い広間がおかれ(No. 16, 22, 24, 25), カージャール朝期になると浅いイーワーンと三部構成の部屋が合体したものも多く(図 No. 32) 中軸線上のスペースがかなり広く取られる傾向がみられる。

第3に入口の位置は, 1. 中庭の中軸線上にあたり中庭に面するイーワーンと背中あわせに配される場合(表 2-2 に「中」と表記), 2. それ以外の位置に配される場合(表 2-2 に「脇」と表記)があった。前者の方がよりモニュメンタルで, 例数も多い。マドラサ建築ではモスク建築⁽³⁷⁾と比すると, 入口はヶ所で中軸線上に堂々と構築される傾向が強い。ただし外観にあらわれるのはタイルで飾られた入口イーワーンだけでその両脇には店舗が並ぶ場合がおおく

(図 No. 11), 先述した中央アジアの例とはことなる。古くはダーラーンと呼ばれる通路状の長い部屋が入口と中庭の間をつなぐ場合が多い。サファヴィー朝期になると, 入口イーワーン (図 No. 7) からハシュティー (八角形玄関広間, 図 No. 31) をへて中庭イーワーンと続く形式がマドラサ入口の定型となる。より手の込んだ形として 1650 年以後になると入口イーワーンと中庭イーワーンが独立し, 通路が振分になる⁽³⁸⁾こともある (図 No. 31)。

第4に中庭の隅切りの有無について検討すると, イスファハーンの例に関しては, ティムール朝までは隅切りはみられず⁽³⁹⁾ (図 No. 2), 1598 年のモッラー・アブダッラーになって初めて中庭の隅を 45 度に造ることが始まり, この部分の居室配置の工夫が進み (図 No. 1), 3 部屋に割り付ける例が定型化し, ここに光庭を配する例も出てくる (図 No. 34)。したがって中庭の隅切りは限られた敷地内で居室数を増やすための一つの工夫であったといえよう。隅切りした一部に水廻りの施設を配することも多い (図 No. 31)。

③ 併設施設

建築分析に用いた 29 棟から調査ずみの現存マドラサ 34 棟に対象遺構を拡大し, マドラサの併設施設について検討をおこなう。多くのマドラサは学院建築が主体で, 上記で検討したイーワーン (図 No. 12), 居室 (図 No. 17, 19), 特別室 (図 No. 20, 27) などの要素が中庭まわりを構成している。学生の起居する中庭建築が主体な場合に建立者の墓が付設あるいは近傍に位置する場合は 7 例 (No. 2, 3, 4, 6, 7, 9, 26) あった。最初の 6 例はティムール朝以前の創建でかなり立派な廟建築が建立されているのに対し (図 No. 7), 最後の例はサファヴィー朝期の建立で郊外に位置し廟は中庭廻りの広間を占めるのみである (図 No. 26)。以上からティムール朝期以前には建立者の大規模な墓廟を併設するのが通例であったが, サファヴィー朝期になって大バーザール周辺に建立されたマドラサはむしろ墓を併設しないことのほうがおおかったといえる。

また、シャベスタンと呼ばれる夜や冬の礼拝のために機能する天井の低い多柱室をそなえる例が2例(No. 28, 31)あり、両者とも大きな礼拝室も有している(図 No. 31)。また、規模の割に大きな礼拝室をもつ6例(No. 18, 20, 21, 27, 31, 32)は、サファヴィー朝期にモスク建築で定型化する3分割の礼拝室を有しており(図 No. 21, 27)、これらは1650年以後に住宅地内に建設されたマドラサである。このような小規模マドラサにおおきな礼拝室が設置された理由をおしはかれば、礼拝室がマドラサに属する人々だけに使われたのではなくもう少し多くの人々の利用も目論まれていたのかもしれない。居住施設を備えたマドラサとはいえ、これらのマドラサには近隣の人々の礼拝所となるコミュニティー・センターのような役割が付加されたことは考えられないだろうか。一方でサファヴィー朝末からカージャール朝にかけて新市街地にたてられた大きなモスクには居住用の小室を複数備えた例⁽⁴⁰⁾もある。このように17世紀半ば以後の実例からは単純に神学生が居住し勉強する場をマドラサ、一般の人々の礼拝の場をモスクと割り切って考えられない例もある。

例外的にマドラサが既存の宗教建築に付属して建立された場合もみられた。墓廟複合体が中核となっているものが2例(No. 10, 29)、大モスク建築が主体となっているものが3例(No. 5, 13, 14)あった。このようなマドラサは規模としてはDあるいはEランクの小規模に属している。ハルン・ヴィラヤ廟(図 No. 10)とイマームザデ・イスマイール(図 No. 29)に付設されたマドラサは、入口としてのイーワーンのほかに居室だけを配しあたかも廟付属の宿泊施設のようなものである。これらは、聖なる人をまつた廟が建築的に整備されていく過程で、中庭を付加することで居住可能な施設を準備した例であろう。したがってマドラサと呼ばれてはいるがハンカーやザヴィエと呼ばれる修道院建築に近いものではないだろうか。また、マスジディ・ジャーミに付加されたスッフ・ウマル(図 No. 5)は、本来は大モスクの中に含まれていた高等教育という部分が14世紀に施設として分化した例とみなすことができよう。そして、マスジ

ディ・シャーに付加された2棟のマドラサ(図 No. 13)は居室を計画していないという点から、マドラサの中から学生居住の部分を削除して新都に設置された王立モスクの中に特別な教学伝授の場を用意したとかがえられるのではないだろうか。このようにマドラサとはいえ、既存の宗教建築に付加された場合は幾分か性格が違うものであったと思われる。

なお、マドラサ建築とほぼ同時におそらく同じ建立者がセットとして寄進したことを確認できる現存遺構は、No. 11 と No. 25 のモスク(図 No. 11)、No. 28 の隊商宿(図 No. 28)とバーザールだけで、今後のワクフ文書の研究に期待したい。

④ 立地

最後にマドラサの立地を検討し、規模との相関関係を明らかにし、併設施設によってその性格を考察したい(表2-1のNo. 1~35、但しNo. 8, 35を除く)。

イスファハーンでは8世紀後半にいまのジャーミの位置に金曜モスクが建設され、それ以来古広場とジャーミを中核として市街地が形成された。イスファハーンの旧市街を北のトクチー門から南のハサン・アーバード門へと蛇行する大通りはそこに面するいくつかの古い建築からティムール朝以前にさかのぼる古い通りであることがわかる。16世紀末にサファヴィー朝の首都として旧市街地の南西部が計画的に開発された時に王の広場と関連してこの通りも整備がすすんだことはバーザール周辺に現存するモスクやマドラサによって跡付けられる。その後19世紀に商業施設には新陳代謝があったがサファヴィー朝期の状態が根幹となった。現状では都市計画道路によって分断された個所もあるが、マスジディ・ジャーミの北から王の広場の南400メートルには両側に商店がならぶ。いくつかの支線がのび、商店建築の背後にはモスク、マドラサ、サライなどの公共建築が接続し、街の中心のバーザールとなっている。マドラサの立

地を調べると、この経済の大動脈ともたとえられる大バーザール⁽⁴¹⁾に面する場合と大バーザールからの支線をつうじて近傍に位置する場合、街の中心をはなれた住宅地内に建設される 3 つの場合にわけられる（地図 2）。

第 1 の大バーザール沿いには 17 棟（北から南へ No. 2, 5, 24, 19, 10, 1, 25, 11, 34, 15, 16, 12, 13, 14, 23, 17, 33）を数える。

第 2 の大バーザール近傍には 3 棟（東側に No. 3, 29, 西側に No. 6）を数える。

第 3 の住宅地内に 13 棟を数える。その内訳は城壁の内側に 6 棟（東部分に No. 26, 31, 18, 西部分に No. 7, 4, 20）、城壁の外側に 7 棟である（チャハルバグ大通りより東の南部分に No. 28, 32, チャハルバグ大通りより西に No. 9, 21, 22, 27, 30）となる。

規模べつに立地の傾向を検討しよう。室数ランク A から C の大規模なマドラサはほとんどすべて大バーザール沿いに立地する。ただし、もっとも大規模なチャハル・バグ（No. 28）は上記 3 種に類型することの難しい宮殿域にめんする庭園区域に立地している。

一方、室数ランク E に属するマドラサは住宅地内に立地する例がほとんどである。室数ランク E に属しながら大バーザール沿いに位置するのは、はじめから居室を計画しないマスジディ・シャーの 2 棟（No. 13, 14）と今世紀の改築により規模が縮小したアルマシーエ（No. 23）で、例外といえよう。

のこる室数が 18 から 26 という D ランクは大バーザール沿い、大バーザール近傍、住宅地内の 3 者が混在するのであるが、大バーザール沿いの例が多い。D ランクで住宅地に立地する No. 9, 22, 32 は比較的大きな礼拝室を有しているので、先に述べたコミュニティー・センターとしてのマドラサの性格が強いとおもわれる。

以上の立地と規模の相関関係から現存遺構における 3 つの際立った組み合わせが抽出できよう。それは、「大バーザール周辺の居室 37 室以上の大規模マド

ラサ」,「大バーザール周辺の居室 20 室程度の小規模マドラサ」,「住宅地内の居室 10 室程度の特小規模マドラサ」である。

IV マドラサの歴史的・地理的分布状況

調査から収集した現存マドラサに、資料から抽出した非現存マドラサを加えた 97 棟のマドラサについて、現存と非現存にわけたうえで、わかる限りで年代順にならべたのが表 2-1 である。この表から指摘できるのは以下の点である。

1. なんらかの痕跡が遺存するのみあるいは改築が行われているものの、現存遺構に 1500 年以前のものが 9 例とかなりあり、うち 14 世紀の遺構が比較的好い。2. サファヴィー朝期のマドラサが現存遺構では 3 分の 2、非現存遺構でも建立年代は不明ながらサファヴィー朝期に存在したものも含めれば 3 分の 2 を超える。なかでも 17 世紀後半から 18 世紀初頭の遺構が多く非現存を含めると 1645 年からの 75 年間に 27 棟のマドラサが建設されている。3. それにひきかえ 18 世紀半ば以後の遺構が少ない。モスクではこの時期の遺構がよい⁽⁴²⁾。

地図 2 には、現存確認のできた 34 棟を黒い四角(表 2-1 では■)で、地図上の位置に非現存確認のできた 27 棟をコメジルシ(表 2-1 では□, □G はガウベの地図による位置)で、大凡の位置のわかる 25 棟を番号の前に? の表示をして地図上に書き込み(表 2-1 では△), 位置不明なものを欄外にまとめた(表 2-1 では?)。ただし大凡の位置とはかなりの面的拡がりをさしている。

現存マドラサについての立地は前章でまとめたので、非現存ながら位置を推定できるものを前章と同様に 1. 大バーザール沿い, 2. 大バーザール近傍, 3. 住宅地内の 3 つのカテゴリーに分けて検討してみたい。

まず大バーザール沿いと思われるものは 9 棟(北から南へとすれば, No. 46, 44, 49, 51, 48, 42, 43, 93, 81)のうち 4 棟 (No. 42, 43, 93, 81) は

ハサン・アーバード門の外側にある。

次に大バーザール近傍にあるものはマスジディ・ハキームの近傍に 4 棟 (No. 56, 57, 65, 78), マスジディ・ジャーミの近傍に 2 棟 (No. 37, 45), 古広場の近傍に 2 棟 (No. 63, 64), 王の広場北東にあたるゴルバハルに 3 棟 (No. 60, 87, 88) の計 11 棟がある。

最後に住宅地内に位置するものは 30 棟を数える。城壁内⁽⁴³⁾の例では大バーザールの東側を北から南へ辿ると以下の 12 棟が数えられる。すなわち、ジュバーレに 1 棟 (No. 62) ダルアル・バッティーフからアハマド・アーバードに 5 棟 (No. 36, 61, 72, 73, 90), ヤズド・アーバード 1 棟 (No. 55), シエイフ・ユーズフに 5 棟 (No. 52, 53, 59, 71, 97) が位置する。同じく城壁内で大バーザールの西側には 7 棟 (No. 66, 67, 68, 69, 84, 86, 89) が数えられる。

一方、城壁外ではチャハル・バーク大通りより東側に 4 棟 (No. 50, 79, 94, 95), チャハル・バーク大通りより西側に以下の 7 棟が数えられた。すなわち、ダルベ・クシュクに 2 棟 (No. 58, 85), モスタフレクに 3 棟 (No. 77, 91, 92), アッパース・アーバードに 1 棟 (No. 70) セティ・ファティマに 1 棟 (No. 96) となる。

先の現存マドラサの立地と合わせて検討すれば以下の点が指摘できよう。なお、97 棟のうち位置の推定ができた 86 棟から地図 2 の範囲外の 3 棟 (No. 8, 35, 40) を除いた 83 棟を母集団とする。1. 大バーザール沿い、大バーザール近傍に 40 棟という約半数のマドラサが位置する。この区域は面的広がりに限られた帯状の区域を占めるため、街の中でマドラサの密度が高い区域となる。2. サファヴィー朝期に住宅地であったことが推察される区域にはのこる 43 棟のマドラサが分布する。かなり広い区域を占めるために、マドラサの密度は低いながらほぼ均等にマドラサが分布している。3. 現存遺構に大バーザール沿いの例が多い。

第一の点は、大バーザールの総延長をトクチー門からハサン・アーバード門の外側まで含めて2.7キロメートルとすると、そこに26棟のマドラサがあることになる。すべてが同時代に機能していたとは考えられず、また地域による粗密はあるものの、この数はバーザールの背後には約100メートルおきにマドラサが建立されたことを物語る。また現存遺構のうちサファヴィー朝期以後に建立された大規模なマドラサはほとんどバーザール近くにあるので、非現存のものにも比較的規模が大きいものがあったことが推察される。したがって、マドラサの数と学生収容人員の点からマドラサの立地としては大バーザール沿いもしくはその近傍が好まれたといえよう。その理由を考えれば、マスジディ・ジャーミとマスジディ・シャー、少し離れてマスジディ・ハキームというサファヴィー朝期までの大モスクに地理的に近いので、学生や教授たちにとって近傍の多くのマドラサや大モスクで行われる講義への参加の便、建立者にしてみれば街の目抜き通りに学院を建てるという自負などが思い浮かぶ。大バーザールが物品の流通だけではなく、知的情報の集積という側面でも機能していたことが指摘でき、マドラサやサライといった異邦人の仮のすまいが住宅地内ではなく、大バーザールという不特定多数の人々に開かれた領域に位置していた点は興味深い。

第2の点は、旧市街地のアハマド・アーバードや城壁外のサファヴィー朝期の新市街地アッバス・アーバード、ビード・アーバード、ハーजूなどでは住宅地内にマドラサが点在している。郊外にあるマドラサの現存遺構からは比較的小規模ながら大きな礼拝室を有する点、廟建築の併設等が指摘できた。また建設年代は17世紀後半以後に集中がみられる。これらの点から郊外のマドラサの存在理由を考えると、新市街の開発の拠点、コミュニティー・センターとしての存在、墓と関連する修道院的性格などが仮説として考えられる。先の大バーザール周辺の大モスクやマドラサでおこなわれる授業に参加するという点からかんがえると、あまりにも遠い位置に同じ講義を聞こうとする学生の宿舍

としてのマドラサが設立されるのは奇妙であり、このことから周辺部のマドラサは中心部のマドラサと多少異なる性格をもっていたのかもしれない。

第3の点は、住宅地内に比して大バーザール周辺の伝統的建造物の遺存度が高いことを現している。調査前の予想に反して1994年と1995年には大バーザール周辺のマドラサは歴史的建造物としての保存工事も進みながら、学生が居住していた。それにひきかえ1924年の地図にある郊外のマドラサの多くが現状では跡形もなく新建築に置き換わっていた。

最後に歴史的分布と地理的分布をまとめたい。セルジューク朝期および14世紀のマドラサの遺構はマスジディ・ジャーミと古広場を中心とする半径500メートルくらいの範囲に点在している。ティムール朝期になるとダルベ・クシュクやハサン・アーバード門の外にも大きな廟を併設するマドラサが建立された。16世紀には大バーザール沿いの例が目立つ。10世紀以来16世紀までの建築遺構は、他の種別を含めてもマスジディ・ジャーミと古広場を中心とする半径1キロメートルあまりの城壁内およびそのごく近傍におさまり⁽⁴⁴⁾、ほぼこの区域が市街化していたことが想定される。

16世期末にイスファハーンはサファヴィー朝の首都となり、首都のマドラサとして王の広場周辺のマドラサがまず建立された。バーザール沿いおよび近傍のマドラサ建設活動は18世紀初頭まで続き、大バーザール近くのマドラサ群という一つのグループを作り出した。一方、市域が広がるとともに、1650年頃から新市街地の核としてあるいは旧市街地再開発の核としていくつかのマドラサが住宅地内に建てられるようになったのではないだろうか。1645年から75年間に、建立が明確なものだけを取り出しても27棟のマドラサが集中的に建設され、しかも住宅地内に立つマドラサの建立も多い。この期間には14棟のモスク建設も確認できる⁽⁴⁵⁾ので、建設活動が盛況であったことが伺え、しかもマドラサの例数が多いことからマドラサが寄進の対象として好都合であったといえよう。

18世紀にアフガンの侵攻により街は荒廃するが19世紀に入ると建築活動が再開され、多くのモスクが建立された⁽⁴⁶⁾。マドラサの現存遺構としてはチャハル・バグ（No. 28）に比肩する規模をもつサドル・バーザール（No. 34）と比較的小規模ながら大きな礼拝室を有する3例（No. 31, 32, 33）がある。1924年の地図に記載された14棟は建立年代不明で、19世紀から20世紀初頭に建設された可能性もあり再検討を必要とする。そして、カージャール朝期の最後にあたる1924年の地図には本来マドラサでありながらモスクと記述された例が10棟を数える。一方、カージャール朝期の大モスク建築には、居住可能な居室を中庭廻りに複数そなえた例がある。これらの点をかんがえあわせると、カージャール朝期にはモスクとマドラサにどのような定義がなされていたのだろうか。今後の課題として、モスクやマドラサがどのような人々にどう使われていたのかを明らかにすることがのぞまれる。

結

イランおよび中央アジアにおけるマドラサ建築の生成過程の中でイスファハーンの実例の位置づけを検討したうえで、イスファハーンのマドラサの悉皆調査にもとづいて詳細な建築形態と地理的歴史的分布状況についてまとめた。

現存遺構から辿れる範囲では、イランおよび中央アジアでのマドラサ建築の定型化はティムール朝期の中央アジアおよびホラサーン地方に建立された王立マドラサが寄与するところが大きく、サファヴィー朝期のイスファハーンの諸例はその後継例としていくつかの実用的改良を指摘することができた。カージャール朝期には現存実例が少ないが、サファヴィー朝期の傾向を引き継ぐ中で住宅建築との類似、モスク建築との類似などが指摘できた。

現存遺構の立地の分析からは、大バーザール周辺のマドラサと住宅地内のマドラサにわけることが適当で、規模、併設施設および建立年代の分布を考慮す

ればマドラサの性格自体が異なるのではないかという仮説を提案した。なお立地と規模の相関関係から3つの特徴的な組み合わせを設定することができた。

非現存マドラサも含めたマドラサの位置の考察によって、歴史的分布からは1645年から75年間のマドラサ建設の集中、地理的分布からは大バーザール周辺の集中と住宅地内の点在が確認できた。

- 1 Robert Hillenbrand, *Islamic Architecture*, Edinburgh University Press, 1994, pp.173-251, 508-524 参照。
- 2 1650年までとした理由は、本稿においてはサファヴィー朝期のマドラサの建築特色がどのような過程を経て出現したのかという点を明らかにする目的でこの表を作成したために、同時代までのマドラサを可能な限り収集した。なお、1650年以後1720年までの既報の現存実例は表2-1に記載したイスファハーンの実例だけであった。イランおよび中央アジアのイスラーム建築に関する既往の研究において、網羅的に所在や形態が明らかにされているのは、Golombek や O'kane が扱ったティムール朝期末(1500年代初頭)までである。このように、1500年以後については悉皆調査的な研究がないために実例に偏りがあることは否めない。そのためイスファハーンの現存マドラサ遺構に関しては本稿は網羅的に現存実例を収集することを目的とした。
- 3 前出 Hillenbrand, 1994, pp.174-175.
- 4 イマーミエはイル・ハーン朝期の創建ながらサファヴィー朝期の改修が加わり、創建当初の姿を正確に復元することは難しい。本稿においては、4イワーン式2層居室の躯体はイル・ハーン朝に遡り、サファヴィー朝期に装飾的な改修が行われたことを前提とした。なお、現状では1, 2階とも居室は中庭面に各室占有のアルコーブをもち、2階の各室へのアプローチする通路は建物の外側に配される外廊下式である。この外廊下の部分は無蓋で鉄筋コンクリートの躯体が露呈している箇所もあり、外廊下に改修されたのはサファヴィー朝期あるいはそれ以後とおもわれる。
- 5 シリアのマドラサでは、12世紀のボスラのクムシュタキーン・マドラサ(1136年)が最古の遺構で、13世紀にはアレppoとダマスクスに多くの実例が遺存する。
- 6 アナトリアのマドラサでは、12世紀中葉のトカトとニクサールのヤギバサン・

マドラサが最古の遺構で、13世紀にはアナトリア半島全域に多くの実例が遺存する。

- 7 イラクの実例は少ないが、13世紀に属するのはバグダードのムスタンシリヤ学院(1233年)と通称アバシード・パレスと呼ばれる1230年にシャラフ・アッディン・イクバル・アッシャラビーが建立したマドラサの2棟である。Tariq Jawad Al-Janabi, *Studies in Medieval Iraqi Architecture*, Baghdad, 1982, p.69.
- 8 カイロのマドラサでは、13世紀のアイユーブ朝の2つの遺構(1225年建立のカーミリヤと1242年建立のサーリヒヤ)が最古で13世紀後半からのマムルーク朝期には多くの実例がある。
- 9 アナトリアのマドラサには中央をドームで覆った実例が3分の1近く存在する。前澤奈緒子、『中世アナトリアにおけるマドラッサ建築の二類型に関する歴史的考察』、『日本建築学会大会学術講演梗概集』, 昭和54年9月, p.1839.
- 10 前出 Hillenbrand, 1994, p.222.
- 11 アナトリアやムスタンシリアでは居室の上下階とも中庭側にアーケードの架かった通廊をとるために内廊下式となる。
- 12 Hillenbrand はセルジューク朝期におけるモスク機能の多様性と2層構成のモスクを結び付けて、モスクの2階部分に居住施設があったとするが、セルジューク朝期のモスク遺構で、中庭廻りに二層のアーケードをもつものはない。アルディスタン、イスファハーンの2階部分は1300年以後に2層に改修されたものである。前出 Hillenbrand, 1994, p.179.
- 13 イル・ハーン朝のナタンズズのジャーミでは中庭廻りのアーケードを二層に構成し、またヴァーラミンのジャーミやアシュタルジャンのジャーミなどもアーケードは一層ながら中庭の広さに比してアーケードの立ち上がりが高くなる。この時代には垂直性を強調する傾向が見て取れる。
- 14 シリアの礼拝室は中庭に面した横長の部屋で通例3つのドームをいただく。
- 15 マドラサ建築において主軸イーワーンの奥になんらかの室を有する例をたどると、アナトリアのマドラサにみられる主軸イーワーンの奥に廟建築を配する例へといきつく。エトルクシュ・マドラサ(アタベイ, 1224年), チフテ・ミナーレ・マドラサ(エルズルム, 13世期末)。
- 16 前出 Hillenbrand, 1994, p.190.
- 17 三浦徹, 『ダマスカスのマドラサとワクフ』, 『上智アジア学第13号』, 1995年, p.34.
- 18 イスファハーンの4例では主軸線の終点に廟を建設する例は確認できなかった。

- ヤズドのシャムシーヤ (1365 年頃) で主軸イーワーンの奥に墓室が配され、マドラサの寄進者であるアミール・シャムス・アッディン・ムハンマドが葬られている。
- 19 後述する、規模、イーワーンの立ち上げがない点、中庭の隅切りなど。
- 20 本稿で中央アジアに小規模の実例を収集できなかった事に関しては、悉皆調査がなされていないために、本来存在するはずの実例が明らかとなっていない可能性が大きい。プハラのチャル・バクル複合体の中にあるマドラサは、立地、形態、規模も異例である。
- 21 唯一例外としてチャハル・バグ (No. 28) だけは大通りに面するファサードをもち、礼拝室の前には 2 基一対のミナレットが立つ。なお、サファヴィー朝期にはモスクにおいてもミナレットがたてられることはまれとなり、ゴルダステと呼ばれる木造の四角錐屋根をのせた櫓がイーワーンの上に作られ、そこからアザーンが行われるようになった。現存マドラサにおいても No. 20, 21, 24 には屋上にゴルダステが設けられている (図 No. 21)。
- 22 ティムール朝期のホラサーン地方のマドラサ建築には中庭の隅を 45 度に面取りする実例もある (ハルギルドのギヤッシーヤ、マシュハドのパリザドとバライ・サル、クフサーンのトゥマン・アガ)。ただしこれらは隅の特別室へのアプローチを目的とし、面取りした部分に 3 室の居室を配するようになるのはサファヴィー朝期のモッラー・アブダッラ (No. 12) からである。
- 23 Seyyed Redaxan, *Map of Isfahan by Sultan Seyyed Reza Khan in 1302 H.*, Teheran, 1984.
- 24 TAVO, B-VII-14.5, Beispile Islamischer Städte, Das Şafavidische Isfahan, 1989.
- 25 シャルダンの記述から、『メドレセ＝セフィヴィー』はシェイフ・ルトゥフ・アッラーモスクの裏手近くにあったことが推察される。
- 26 ガウベはニザム・ウルムルク廟の西側に記しているが、シャルダンの記述からは、タバラク城砦の西北方を想定できる。
- 27 羽田正著, 「シャルダン『イスファハーン誌』研究」, 1996 年。
- 28 索引には本文中から 24 個のマドラサを列挙している。索引にはないが本文 46 頁の「モスクと同じ名の大きな学院」とありモスクはセドルをさしているのでマドラサの名はセドル, 本文 89 頁でハラン＝ヴェライエド廟を述べている時に「近くにある学院」という記述を加えて 26 個を数える。
- 29 Masashi Haneda, “The Character of the Urbanisation of Isfahan in the

Late Safavid Period”, *Pembroke Papers* 4, 1996,

- 30 L. Honarfar, *Ganġine-ye ālār-e tārīxi-ye Eṣfahān, Eṣfahan*, 1344(1965), A. Mehrābādī, *Ātār-e mellī-ye Eṣfahān*, Teheran, 1352(1973).
- 31 創建は古くとも改築や改修が重なり実際の建築遺構の時代判定は難しい。一つ一つの建物を徹底的に調査して歴史の変遷を辿ればこの欠点は補われるが、1994年、95年の調査では現存マドラサの概要を調査することに主眼をおいたため、各建築の本格的な調査は今後の課題である。本稿においては躯体の概形ができあがったと判断できる時代を設定して年代順にならべた。No. 11とNo. 17は1970年代以後に現代建築に改築されているため、それ以前の状態を示す写真資料および平面図にをもちい、伝統的な形態を可能な限り復元し、表2-2では創建時の年代に挿入した。
- 32 拙稿、『マドラサのフジュラ』, [Inax Report No. 129], 1997年。
- 33 室数は、イーワーンや特別室をのぞき、中庭に面して居室として計画されたものだけを数えた。実際には中2階や屋上などにも小さな部屋が設けられている。
- 34 1615年建立のシーラーズのハーンでは、中庭側のアルゴーブを通廊とする部分も存在するが、外廊下および廊下の両側に居室を配する中廊下式も併存している。
- 35 拙稿共著、『イランの伝統的住居に関する考察——1から3』, [日本建築学会大会学術講演梗概集], 1997年, pp.41-46。
- 36 29棟中20棟 (No. 2, 9, 10, 11, 12, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 24, 25, 28, 29, 32, 33, 34)が現状でもマドラサとして使われ、うちNo. 11をのぞく19棟のうちNo. 28と34にはマドラサ教授が居住し、残る17棟に学生が居住していた。なお、No. 26はマドラサとして改築工事中、No. 27, 31はモスクとして利用されていた。残る4棟 (No. 1, 5, 7, 23)は無住であった。
- 37 拙稿共著、『イスファハーンの現存モスクに関する調査研究(1)~(5)』, [日本建築学会大会学術講演梗概集], 1995年, pp 517-526。
- 38 通路が派分になる例は、さかのぼれば王のモスクの入口にみられる。
- 39 注22参照。
- 40 マスジディ・マハレ・ノウ (18世紀前葉), マスジディ・サイイド (1839-93年), マスジディ・ラヒーム・ハーン (1915年)がある。拙稿共著、『イスファハーンの現存モスクに関する調査研究(4)』, [日本建築学会大会学術講演梗概集], 1995年, p 524。
- 41 大バーザールという呼称を用いたが、北のトクチー門から南のハサン・アーバード門まで通じる通りのことをさし、古広場から新広場までは一筋の通りだけでな

く何筋かの通りを含む面的広がりをもつ区域を設定した。

42 前出『イスファハーンの現存モスクに関する調査研究(2)』, p 520 参照。

43 サファヴィー朝期の城壁はすでに機能を失ったようであるが市域の広がりをつめるために城壁内と城壁外という概念を用いた。なお、旧市街城壁の位置および機能については羽田正著、『1676年のイスファハーン——都市景観復元の試み——』,「東洋文化研究所紀要第118冊」, p 188-197 参照。

44 地図1および2の範囲ではセルジューク朝創建のマスジディ・ロンバンだけは旧市街地の南西1.5キロメートルの位置にある例外である。その他の15世紀以前の郊外の遺構は旧市街地からはかなりはなれた村のような位置にある。

45 前出 M. Haneda, *Pembroke Papers* 4, 1996, TABLE 2 に8例記載 (Nr. 23, 56, 37, 44, 31, 62, 58, 15), 他に Ali Khan(1679), Nimawar(1693), Mahale Nou(c. 1700), Maryam Beigom(1703), Ali Qoli Aqa(1710), Hajj Muhammad Mahdi (1720) が調査によって確認できた。

46 前出『イスファハーンの現存モスクに関する調査研究(2)』, p 520 参照。

表1. イランおよび中央アジアの1650年までのマドラサ現存遺構

NAME	LOCATION	DATE		SOURCE
				Wi. T.A O'K Reg H.
Nizamiya	Khargird	1080	ruin	125 4.1
Qarachay Beig	Samarqand	11c.	excavated	4.3
Madrasa	Rayy	12c.	excavated	4.8
Do-Minar	Tabas	seljukid	dominar, recon.	4.13
* Haj Hasan	Isfahan(No.1)	seljukid	reconstructed	
Madrasa	Garjistan	12c.	ruin	p.183
Madrasa	Shah-I Mashhad	1175	ruin	4.7
Madrasa	Khwajeh Mashhad	12-13c.	ruin	4.13
Malik Zuzan	Zuzan	1219	ruin	2 340 4.6
* Imamiyeh	Isfahan(No.2)	1324	recon.?	100 114 4.13
Vagt wa Sa'at	Yazd	1325	tomb	67 246
Abu'l Qasim	Yazd	1336	portal	
Chahar Deh	Tabas	14c.		4.13
Madari Sleiman	Pasargadae	14c.		4.9
* Jafariyeh	Isfahan(No.3)	c1350	tomb&portal	68 198
* Ibn Sina	Isfahan(No.4)	c1350	tomb	
* Suffah-i Umar	Isfahan(No.5)	1364	half destroyed	109 167 358 4.13
Shamsiyeh	Yazd	1365		107 208 4.13
* Sultan Bakht Agha	Isfahan(No.6)	1367	dominar	75 115
Saray Mulk Khanum	Samarqand	1397	tomb	27
Gur-i Mir	Samarqand	1405	half destroyed	29 5.12
Ulugh Beg	Samarqand	1417		30 4.13
Gawhar Shad	Herat	1417-38		70 14
Parizad	Mashhad	1417		92 4 333 4.14
Ulugh Beg	Bukhara	1417-20		4 4.14
Ghiyathiya	Qumm	1426	dominar	73 205
Balasar	Mashhad	1426		93 12 334 4.14
Complex	Bistam	c.1430		155
Ulugh Beg	Ghujdivan	1432	part	7 4.15
Qubba-i Sabz	Kirman	1434-46	portal	181 124
Ghiyathiya	Khargird	1438-45		84 22 126 4.14
Do-Dar	Mashhad	1439		94 15 301 4.15
Tuman Aqa	Kuhsan	1440	part, tomb	97 19
Amir Firuz Shah	Turbat-I Sheikh Jan	1442	part	119 24 174 4.15
* Shahshahan	Isfahan(No.7)	1446	recon, tomb	169 368
* Sheikh Abul Qasim	Nasrabad(No.8)	1450	portal	191 235
Diya al-Din	Yazd	15c.		4.13
Madrasa	Derbent	15c.		162
Husayn Baiqara	Herat	1469-1506	destroyed	77 54
* Darb-i Kushk	Isfahan(No.9)	1479	recon, tomb	171
* Haruniyeh	Isfahan(No.10)	early 16c.	recon.	220
Mir-i Arab	Bukhara	1530-36		4.14
* Dhu-al Faqar	Isfahan(No.11)	1543	recon.	
Char Bakr	Bukhara	1560-3		109 5.12
Madari Shoh	Bukhara	1566		4.14
Kukoldash	Bukhara	1568		
Abd Allah Khan	Bukhara	1588-90		4.14
Barak Khan	Tashkent	late 16c.		
* Mollah Abdollah	Isfahan(No.12)	1599		224
Khan	Shiraz	1615		75
Shir Dor	Samarqand	1616		4.13
* Sleimaniyeh	Isfahan(No.13)	1620		107
* Nasery	Isfahan(No.14)	1620		107
Nadir-Diwan Begi	Bukhara	1622		
Tilah Kari	Samarqand	1641		4.13
* Jadde-ye Kuchek	Isfahan(No.15)	1647		314
* Jadde-ye Bozorg	Isfahan(No.16)	1648		314
* Arabha	Isfahan(No.17)	c1650		
Ganjali Khan	Kirman	17c.		297
Abdulaziz Khan	Bukhara	1652		4.14

Wi. = D Wilber, *The Architecture of Islamic Iran - The Il-Khanid Period*, Princeton, 1955, Catalogue No.
T.A = L. Golombek & D. Wilber, *The Timurid Architecture of Iran and Turan*, 2 vols. Princeton, 1988, No.
O'K = Berndt O'Kane, *Timurid Architecture in Khurasan*, Costa Mesa, 1987

Reg = Iranian National Monument Register No.

H. = Robert Hillenbrand, *Islamic Architecture - Form, Function and Meaning*, Edinburgh, 1994, Figure No.

*はイスファハーン所在のマドラサ, LOCATIONの欄に表2のナンバーを記載

表 2 - 1 . 現存非現存別年代順モドラサのリスト

No	NAME	DATE	existed	LOCATION	(1-3)	MAP1924	MAP Gaube	Cha. HAHonarfer	Mehrabadi
		創建 再建		1ハ-イ-1に近い、2同周辺、 3生宅地、*外				page	page
■	1 Haj Hasan/Alī	seljukid c.1650		Meidan-i Kohne	1 E-6	madrasa	～1502.1629～1722	89 26	379 668 39,469
■	/Sulṭān Muḥammad Seljūqī								
■	2 Bābā Qasīm/Imāmiyeh	1325 safa'vid		Shahshāhān	1 B-5	takveh	位譲り、～1502	46	303～13
■	3 J'afariyeh/77° 47' E	c.1350		Yazdābād	2 E-5	non	B.Gafariye	77 20	433～9
■	4 Ibn Sīnā/Bu Alī	seljukid? c.1350		Dardasht	3 B-7	hammam	位置譲り、～1502	47	431
■	5 Saffār-i Umar/ Umar b. Abd'al-Azīz	1364		Masjid-i Jāmi	1 C-5	masjid	M.Gami		44,534
■	6 Dardasht/Sulṭān Bakht' Agha/Shūr-i /正門が2つの大路で囲まれた	1367		west of Masjid-i Jāmi	2 C-6	madrasa	Dou Menare Dar Dast	117 49	316～21 45,426～7
■	7 Shahshāhān	1446 19c.		Shahshāhān	3 B-6	masjid	B.Sahsahan	48	45,237
■	8 Naṣrābād	c.1450		Naṣrābād	*範囲外		範囲外		820～1
■	9 Darb-i Kūshk/Būqeriyeh	1479 c.1720		Darb-i Kūshk	3 F-11	madrasa	～1502	358	20,185, 470
■	/Pa-Shīr/Dar-kushk								
■	10 Harūmiyeh	early 16c qianrid		south of Meidan-i Kohne	1 E-6	imamzadeh	1502～1629	27	508～9
■	11 Dhu-al Faqar	1543 20c.		Golbahar	1 E-7	masjid		33	384
■	12 Mollah Abdollah/77° 9' 77	1599		north-east of Meidan-i Shah	1 G-7	madrasa	1502～1629	47 7	470～5
■	13 Stemaniyeh	1620		west of Masjid-i Shah	1 H-8	masjid	M.Shah		494～8
■	14 Naṣery	1620	1850	east of Masjid-i Shah	1 H-7	masjid	M.Shah		454
■	15 Jadde-ye Kuchek	1647		Golbahar	1 F-7	madrasa	M.Gadde-ye Kucok	12	555～6
■	16 Jadde-ye Bozorg/77° 47'	1648		Golbahar	1 F-7	madrasa	M.Gadde-ye Bozorg	66 11	553～4
■	17 Arabba/Arbān/驛馬	c.1650 20c.		Bāzār-i Hasanābād	1 L-6	madrasa	1629～1722	25 2	858～9
■	18 Ismā'iliyeh at Qasr-Munṣī	safavid		Bāzār-i Hasanābād	3 H-6	non		53	859
■	19 Nuriyeh	1654		Pa Qaleh	1 D-6	madrasa	1502～1629		840
■	20 Shāfiyeh	1657		Dardasht	3 B-7	non	1629～1722	47	582～92
■	21 Tork-hā	1670		Darb-i Kūshk	3 F-11	masjid	～1502	38	859～60
■	22 Mirza Hosein	1688		Bīdābād	3 E-11	madrasa	M.Mirza Hosein	38	649～50
■	23 Almāsiyeh	1693 20c.		Bāzār-i Hasanābād	1 H-7	madrasa	1629～1722	59	500～1
■	24 Kāse' Garān/Hakimiyeh/Shamsiyyeh	1694		Meidan-i Kohne	1 D-5	masjid	1629～1722	52	652～6
■	25 Nimāward	1694		Nimāward	1 E-7	madrasa	1629～1722	35	479～82
■	26 Ahmādābād/Jalālūiyeh	1702		Ahmādābād	3 F-3	masjid	1629～1722	16	650～2
■	27 Shamsābād	1713		Shamsābād	3 L-12	madrasa	1629～1722	67	684
■	28 Chahar Bagh/Soltāniyeh	1714		Chahar Bagh	3 J-9	madrasa	1629～1722	54	685～722
■	/Mādar-i Shah								444～69
■	29 Imāmzadeh Ismā'īl	1720		Imāmzadeh Ismā'īl	2 F-5	imamzadeh	Emamzade-ye Esmā'īl		433
□	30 Mirza Mahdi at Bīdābād	1736～86		Bīdābād	3 E-11	masjid			860
■	31 Pa Qaleh/Sayyid Allāh ad-Dīn	1797		Pa Qaleh	3 H-5	madrasa			749～50
■	32 Šadr Najaf/Šadr Chahar-Bāgh /Amin at-Duleh	c.1850		Chahar Bagh Šadr	3 L-5	masjid			440 443

■	33	Hāi Sheikh Muhammad Ali /Sheikh Islam	Bāzār-i Ḥasanābad	1 I-6 madrasa		860	40 221
■	34	Sadr-i Tulab/Sadr-Ezāzār	Golbahār	1 F-8 madrasa		744~7	475~81
■	35	Rukn-al Mulk at Takht-i Faurad	Takht-i Faurad	3 墓内外		805~22	625~41
□	36	Krān-Malik Shāh/Nizāmiyeh	Dar al-Batikh	3 E-3 masjid	Aramghah-c Nizam ol-Mulk	231	45 788
△	37	Khwājah Nizam al-Mulk /Nizāmiyeh	Dardasht	2?		59 62	38 183
?	38	Tāj al Mulk	?	? ?			37
?	39	Fakhrīyeh	?	? ?			44
△	40	Shahrestān	Shahrestān	* 墓内外			46
?	41	Sayyid Rukn-al-Din Yazdī	Bāzār Khwājah Muhammad	? ?			35~7
△	42	Derwishān	Khāju near Tomb of Shah Hasan	1 J-6,7 non			46 53
△	43	Shah Hasan/Salmīyeh /ネイ王	Khāju near Palace of Shah Hasan	1 J-6,7 non			35 219 221
□	44	Khwājah Malik Musrawī/ /Shākh Lutf Allāh/ネトル	east of Meidan-i Shah	1 G-7 non	Hvage Molk と Lotfollah	6	38 40 395
△	45	Khwājah Sadr al-Din Ali Tabib	near Masjid-i Jami	2?			47
□	46	Naqqashān/イマの家の付いた	pre Kase'Garān	1 D-5 (masjid)		103 28	40
?	47	Mirzā Shah Hossein	?	? ?		688	
□	48	Mirza Rafī	Ḥasanābad	1 I-6,7 non	1502~1722		41
□	49	Safawīyya/イマのイ	east of Meidan-i Shah	1 G-6,7	位置? No. 72?	72 14	279
△	50	Dede Khātun/Pari Khān Khānum	Khāju	3?		687	28 29 221
□	51	Savvī Taqī	pre No. 33	1 I-6 (madrasa)		13	39
△	52	Eftekhār al-Mulk	Sheikh Yusuf	3?			34 221
△	53	Muhammad Šālekh/イマノド = 4レ・ハ??	イマノド・イマノド 城外区	3?		156	42 221
?	54	Faymīyeh	?	? ?			44
△	55	Aqa Kātūf/ハ・47	Bāzār-i Tūchbāst & Bāzār-i Muhammad Amin	3 E-4?	位置? 1629~1722	74 21	605~8
△	56	Mirzā Taqī-Iḥwā Beigam/Taiebe	east of Masjid-i Hakim	2 F-8		34	608~10
△	57	Qarāchagay Beik/Kalbāsi	east of Masjid-i Hakim	2 F-8		8	859
△	58	Hāi Paqor	Darbe Kūshk=Baqeriyeh?	3?			38
□	59	Sheikh Yusuf/イマノド・イマノド	existed in 1670	3 I-2?	1502~1722	137	34 221
△	60	Qarāchagay Beik/Kalbāsi	Masjid-i Maqsd Beik	2 G-7 masjid		76	
△	61	イマノド・イマノド (イマノドの宅)	イマノド・イマノド 街区	3?		78	
△	62	イマノド・イマノド	イマノド・イマノド 街区近く	3?		82	
△	63	イマノド・イマノド	イマノド・イマノド 街区近く	2?		83	
△	64	イマノド・イマノド	イマノド・イマノド 街区近く	2?		83	

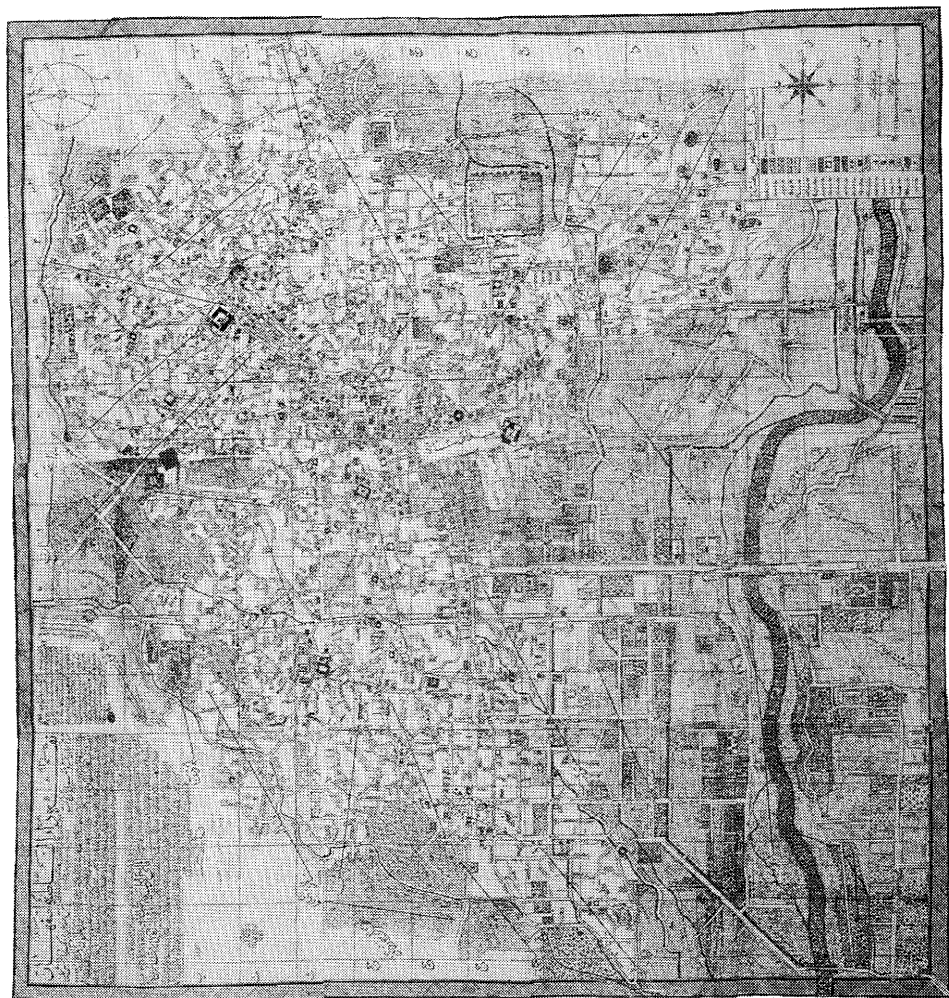
△ 65	344・345	?	[1672]	ニワト谷とバム、 ガウの間の間	2 E-7,8	93	
△ 66	アラブ人	?	[1672]	デハク・イ・マフとデハク・イ・マフの間	3?	109	
△ 67	バシラという名	?	[1672]	デハク・イ・マフとデハク・イ・マフの間	3?	116	
△ 68	74・74=75	?	[1672]	デハク・イ・マフの間	3?	118	
△ 69	遺贈財産のデハク・イ・マフ	?	[1672]	デハク・イ・マフの間	3?	118	
△ 70	王太后	?	[1672]	デハク・イ・マフの間	3?	151	
△ 71	王太后の寄れ学院	?	[1672]	デハク・イ・マフの間	3?	155	
□ G 72	Shafiyeh	1682~87		Ahmadabad	3 F-4?		
□ 73	Ilchi	1686		Ahmadabad Masjid-i Ilchi	3 F-3 masjid		
□ 74	Nasir-quli Beik	1693		?	?	70	
□ 75	Khwajah Mahabat	1693~94		?	?		
□ 76	Aqa Mubarak Mobarkueh	1694		?	?		
□ 77	Aqa Kamāl Khāzen	1697		Mostabek	3?	69	
□ 78	Shauzadehā	1694~1722		Mostabek	2 F-8 madrasa	66	803, 4
△ 79	Mahramiyeh	?	[1694]	Mostabek	3?		753
△ 80	Mortazaviyeh	1699		Mostabek	3?		
□ G 81	Mariam Beigam	1703		Mostabek	1 J-6 madrasa	60	442~7
82	Atarūdi	18c.		Hāzār-i Hasanābad	?		
83	Sharaf	20c.		?	?		
84	Qodsivēh	?	[1924]	Darb-i Imām	3 D-7 madrasa		
85	agarsat Torkhā	?	[1924]	Darb-i Kūshk/forkha線り?	3 G-11 madrasa		
86	near Sombolēān	?	[1924]	Sombolēān	3 E-10 madrasa		
87	Mosir	?	[1924]	Golbahar	2 F-6 madrasa		
88	Golbahar	?	[1924]	Golbahar	2 F-7 madrasa		
89	Tojār	?	[1924]	Chehel Surtūn	3 G-9 madrasa		
90	Jalūl	20c.	[1924]	north of Qaleh	3 G-3 madrasa		
91	near Fabrang	?	[1924]	Sheikh Bahai	3 H-13 madrasa		
92	Fabrang	?	[1924]	Sheikh Bahai	3 H-13 madrasa		
93	Maktab Khāne	?	[1924]	Bazar-i Hasanābad	3 J-6 madrasa		
94	near Ibrahim & Ismāil	?	[1924]	Khānu	3 J-5 madrasa		
95	Ashagāf	?	[1924]	Chahar Bāgh	3 J-8 madrasa		
96	near Sen Fatimah	?	[1924]	Seni Fatimah	3 J-16 madrasa		
97	near Qala	?	[1924]	Pa Qaleh	3 J-16 madrasa		

△=地域の位置に非現存確認済み、地図2には△を記入
□=地域の位置に非現存確認済み、位置に関しては1924年の地図の記載位置、ガウへの地域の記載位置、何名の建築物の所在位置から判定、地図2には△を記入
△=大凡の位置のわかるもの (△Gはガウへの地図による推定位置を採用)、地図2には番号の近くに△を記入
? =位置不明、地図2では欄外に表記

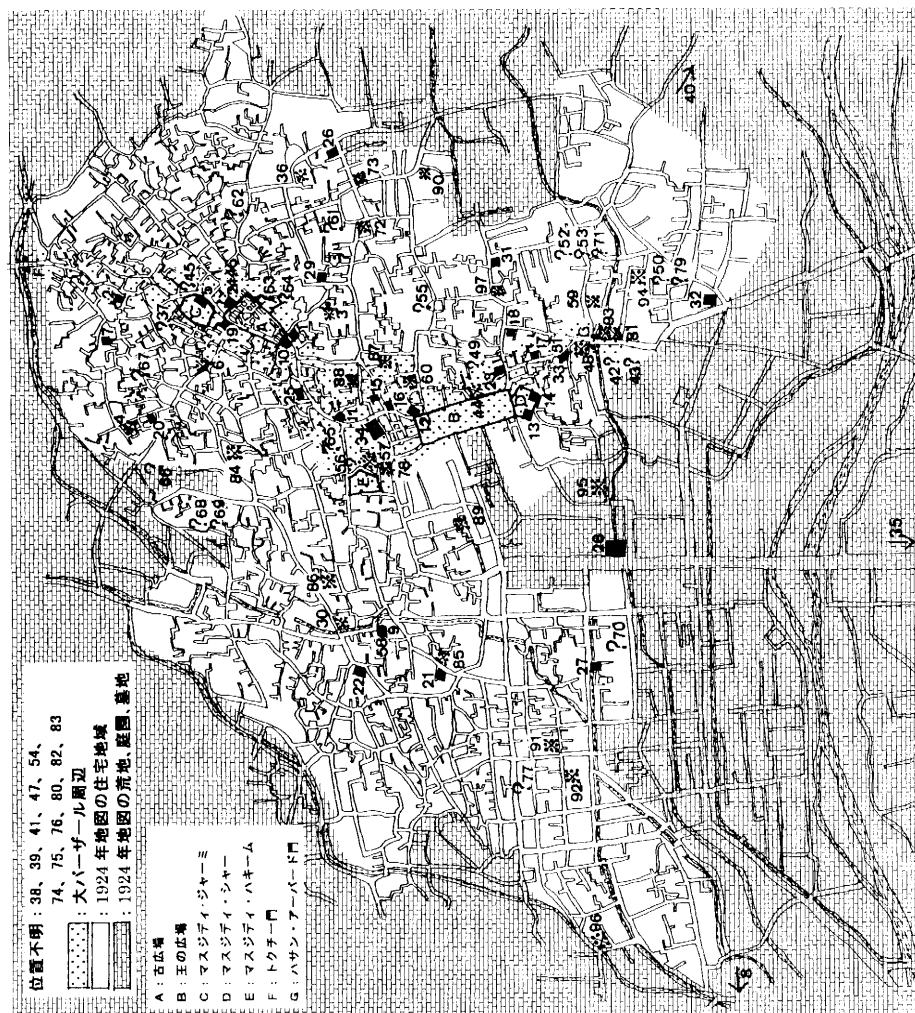
表2-2. 現存マドラサ建築の比較

NAME	DATE 建設年代	規模(室数) 1F 2F 3F	層構成 1階 2階 3階	IVAN 背後()は現状の使用法	入口	隅 付設建築
2 Imāniyeh	1325 17c.	12 11 23 D 2	外廊下	4 高 ドーム室(礼拝室)	D 90	主体: 近傍に廟
5 Saffah-i Umar	1364	14? 6? 20? D 2	?	4 高 5部構成(礼拝室、広間)	脇	90 附属: ジャーミの一部
7 Shahshaban	1446 19c.	11 2 13 E 1	?	2 高 ドーム室(墓)	脇	90 主体: 墓付
10 Ħarūniyeh	early 16c. 19c.	19 - 19 D 1	?	2 低 小中庭(礼拝)	H 90	附属: 新複合体
11 Dhu-al Faqar	1543 20c.	20? 20? D 1	中庭側廊下	2 中庭側廊下	中	n 90 主体: 隣にモスク
12 Mollah Abdollah	1599	25 30 55 B 2	2 偶	2 中庭側廊下	中	D 45 主体
13 Sleimāniyeh	1620	0 - 0 E 1	0 - 0 E 1	2 低	脇	n 90 附属: 大モスクの一部
14 Naṣari	1620 1850	9 - 9 E 1	中庭側廊下	2 低	脇	n 90 附属: 大モスクの一部
15 Ħadde-ye Kūchek	c.1650 12c.	15 22 37 C 2	中軸/隅	2 中庭側廊下	中	n 90 主体
16 Ħadde-ye Bozorg	1647	14 23 37 C 2	中軸	2 中庭側廊下	中	n 90 主体
17 Arabhā	1648	34 34 68 B 2	中軸	2 外廊下	中	n 90 主体
18 Ismāʿiliyeh	c.1650 20c.	25 - 25 D 1	中庭側廊下	2 高 三部構成(礼拝室)	中	n 45 主体
19 Nūriyeh	1654	12 14 26 D 2	中軸	2 中庭側廊下	中	n 90 主体
20 Shaʿfiyeh	1657	20 - 20 D 1	2 偶	2 低	脇	D 45 主体
21 Tork-hā	1670	12 - 12 E 1	2 偶	4 低 三部構成(礼拝室)	脇	* H 90 主体
22 Mirzā Hossein	1670	13 - 13 E 1	2 偶	2 平 三部構成(礼拝室)	中	n 45 主体
24 Kāse' Garān	1688	26 - 26 D 1	外廊下	2 低	中	H 45 主体
25 Nimāward	1694	30 30 60 B 2	中軸	2 中庭側廊下	中	H 45 主体
26 Abmadābad	1702	28 30 58 B 2	中軸	2 外廊下	中	H 45 主体
27 Shamsābad	1713	12 - 12 E 1	2 偶	2 低 広間(墓)	中	H 45 主体
28 Chahar Bāgh	1714	10 - 10 E 1	2 偶	2 低 三部構成(礼拝室)	脇	n 45 主体
29 Imānzadeh Ismāʿil	1720	48 76 124 A 2	光庭	2 低 三部構成(礼拝室)	脇	* H 45 主体
31 Dar-i Kushk	c.1720 1479	20 - 20 D 1	中廊下	4 高 ドーム室(礼拝室)	脇	n 45 附属: 隣複合体
31 Pā Qaleh	1797	18 - 18 D 1	0	4 高 ドーム室(墓, 1479年建立)	中	* H 45 主体
32 Sadr Chahar-Bāgh	c.1850	7 - 7 E 1	2 偶	2 低 三部構成(礼拝室)	中	n 45 主体
33 Ħaj Sheikh Muhammad Ali	c.1850	22 - 22 D 1	2 偶	4 低 三部構成(礼拝室、図書室)	中	n 45 主体
34 Sadr-Bāzār	1859	25 - 25 D 1	0	0 広間(教室)	中	H 90 主体
23 Alnāsiyeh	20c.	60 60 120 A 2	光庭	4 高 広間(礼拝室、図書室、教室)	中	* H 45 主体
23 Alnāsiyeh	20c.	5 - 5 E 1	0	0	脇	H 90 主体

付設建築には、2階居室数(1F)、2階居室数(2F)、総室数(計)を記載。
層構成には、1階2階の別を記載、つづいて2階のものは階段位置を中庭隅(隅)と中軸隅(隅)と中庭隅(光庭)を記入、さらに2階廊下位置を記入
IVAN欄には、4コーナー、2コーナー、コーナーなしの別、続いてコーナー背後に室が続くものについてその形態を特記し()内に現状の使用法を記入
入口欄には、位置別に中庭中軸線上(中)と中軸線外(脇)を記載、つづいて幅分のあるものに *印、さらにバレーン(D)、バレーン(H)、中間室をもたない場合(n)を記入
理障には、隅切りなしで角が90度となるもの(90)と45度方向に隅きりありのもの(45)の別を記入
付設建築欄には、マドラサが主体の場合(主体)、何らかの施設にマドラサが付属する場合(附属)の別を記入

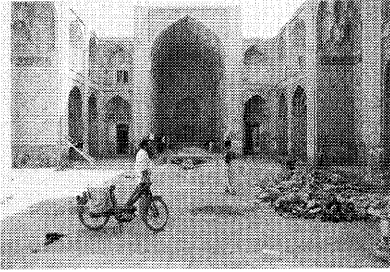


地図 1 . 1924 年の古地図

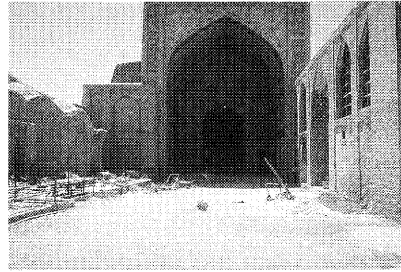


地図2. マドラサ分布図

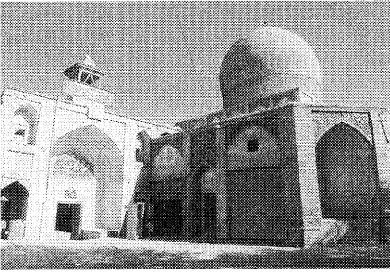
イスファハーンのマドラサ調査から



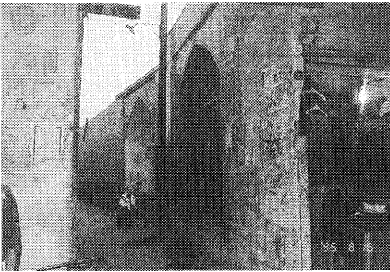
No. 2 イーワーンと居室群，修復中。



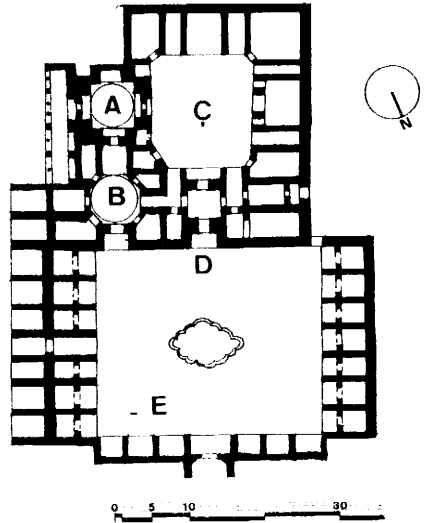
No. 5 右居室群は崩壊。



No. 7 マドラサの入口と廟。

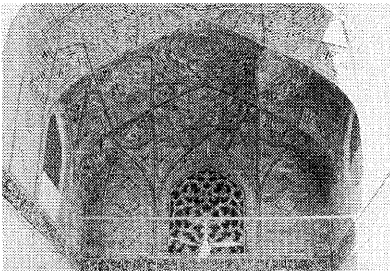


No. 11 小路に面するマドラサ入口。

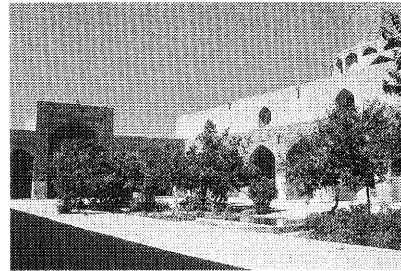


A墓室，B前室，Cホセイニエ
D 1512年の入口，Eマドラサ

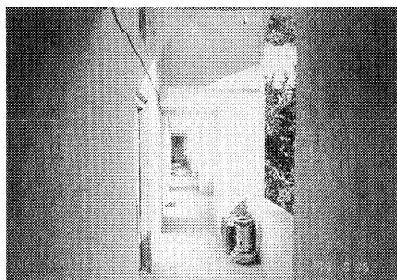
No. 10 聖者廟に付加されたマドラサ。



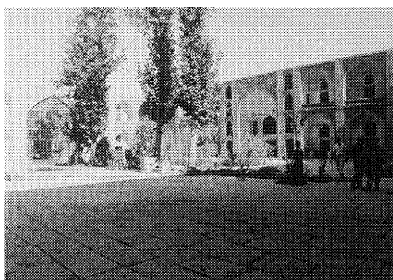
No. 12 礼拝所となるイーワーン。



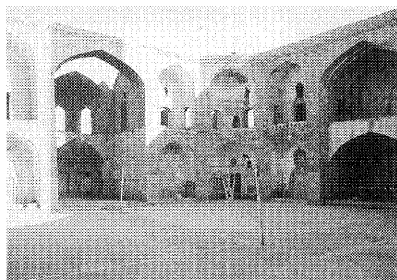
No. 13 右手はマスジディ・シャー。



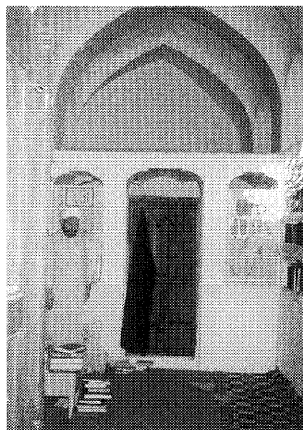
No. 15 2階の中庭に面する通廊。



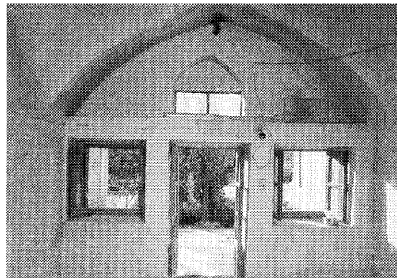
No. 16 大規模マドラサの中庭廻り。



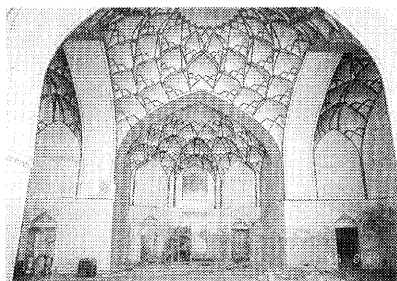
No. 1 隅切りされた中庭。



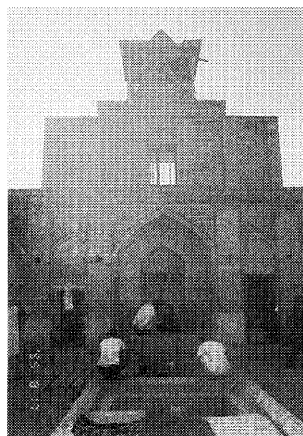
No. 17 伝統的様式を採用する新築居室。



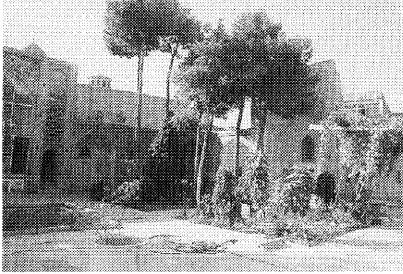
No. 19 居室より中庭を臨む。



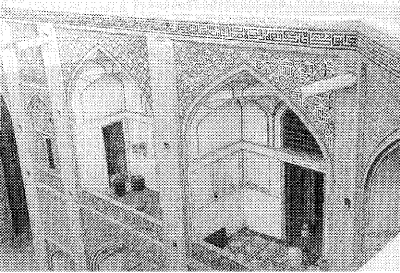
No. 20 三部構成の礼拝室。



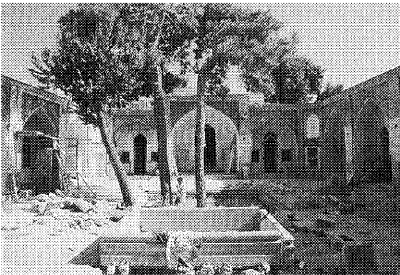
No. 21 入口上部に立つゴルダステ。



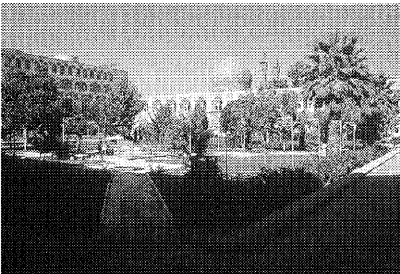
No. 22 高く立ちあがったイーワーン。



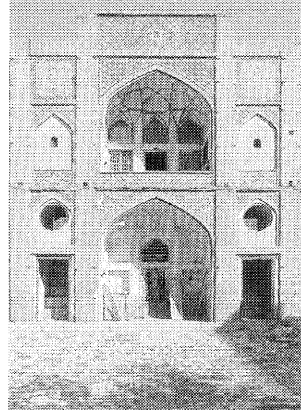
No. 25 屋上より2階居室前のアルコブを臨む。



No. 26 現在改修工事中。



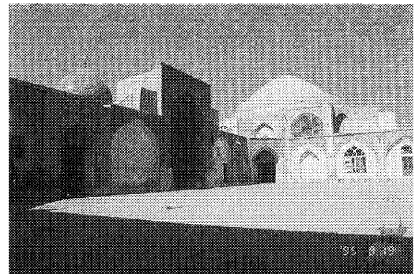
No. 28 隊商宿より礼拝室ドームを臨む。



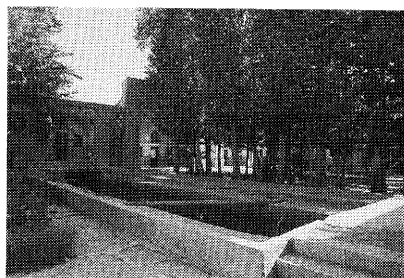
No. 24 中軸上の特別室と両脇の階段室。



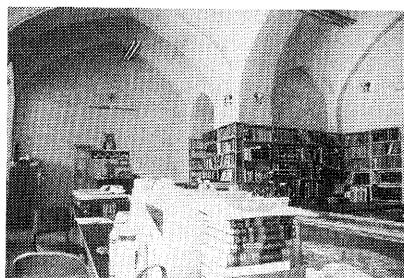
No. 27 三部構成の礼拝室、現状はモスク。



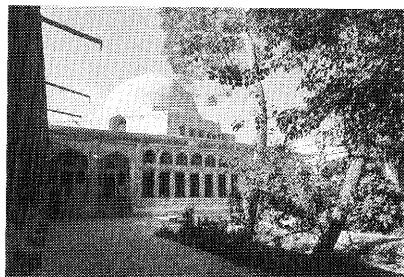
No. 29 マドラサから廟とチャハル・スーを臨む。



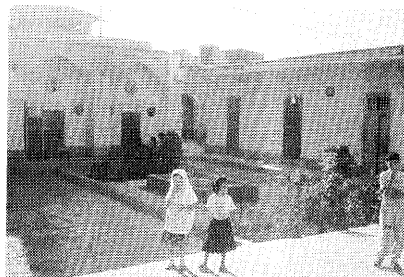
No. 9 一層中規模マドラサの中庭廻り。



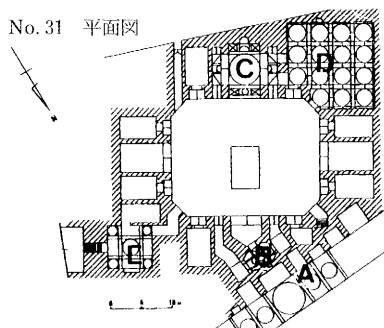
No. 32 図書館に改装された広間。



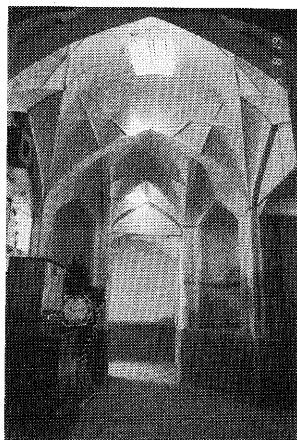
No. 33 7つの窓を持つ住宅風の広間。



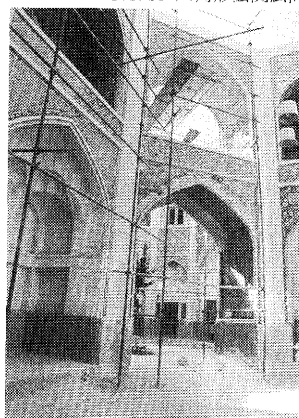
No. 23 今世紀に改築されたマドラサ。



A 入口
B ハシュティ
C 礼拝室
D シャベスタン
E 手洗い



No. 31 八角形玄関広間(ハシュティ)。



No. 34 中庭隅の八角形光庭。